栗山高校と北海道介護福祉学校の連携による一貫した介護福祉教育

北海道栗山高等学校 学級数4 (校長 駒井 信和)

1 福祉の町づくりを目指す栗山町との連携(社会に開かれた教育課程の実現)

本校は少子高齢化等の影響で入学者が年々減少しつつあり、入学者確保は大きな課題になっている。学校の取組のみでは課題の解決は困難であり、将来にわたって本校の存続を熱望する町民を中心に組織した「栗山高校を支える会」や「北海道栗山高等学校魅力づくり委員会」等の支援を受けながら、栗山町と連携して特色ある学校経営に取り組む必要があった。

また、同町は高齢社会の到来を見据え、昭和 62 年に成立した「社会福祉士及び介護福祉法」に基づき創設された国家資格「介護福祉士」の取得を目指す、公立の介護福祉士養成校として「北海道介護福祉学校」を昭和 63 年に開校し、福祉の町づくりを進めてきた。

本校ではこうした地域の教育資源を生かし、地域から信頼され、選ばれる学校づくりを進めるため、令和5年度入学生から北海道介護福祉学校との連携を一層深め、介護福祉教育の充実を図るとともに、生徒が地域の諸課題に主体的に取り組み、課題の解決策を見出す教科として、現在3年生の選択教科として設置している「生活と福祉」を発展的に解消し、3年間継続して介護福祉教育に取り組むことができる、学校設定教科「栗山と福祉」を新たに設置した。

さらに、北海道介護福祉学校では、令和5年度から文部科学省指定事業「専修学校による地域産業中核的人材養成事業」の認可を得て、「地域での介護人材養成に向けた専門学校と高等学校のキャリア形成プログラム開発・検証事業」に取り組むこととなった。こうしたことから、本校と北海道介護福祉学校は連携をより強化・発展させるとともに、連携組織「魅力化コンソーシアム」を構築して行政や産業界とも協働し、高校から専門学校までの一貫した介護福祉教育プログラムの開発と、地域福祉における介護現場のリーダーを志す高校生の育成を目指している。

2 目指すべき生徒像

地域で求められる介護人材の確保に向けては、より早い時期からのキャリア意識の醸成や段階的な専門 知識の習得が必要であり、町教育委員会では令和4年度から介護福祉教育を「ふるさと教育」の一翼を担う 教育活動と位置付け推進しているところである。

少子高齢化や情報化社会の飛躍的な進展に伴い社会構造が目まぐるしく変化する中、地域社会における 共助精神や連帯感の希薄化は国全体で抱える課題として挙げられているが、その課題の解決に教育の果たす べき役割は極めて大きく、人間の尊厳や人権を尊重する教育が改めて求められている状況にある。

同町が目指す「持続可能な地域包括ケアシステム」の構築はまさに時代の要請に呼応したものであり、同町のみならず我が国の将来を見据えて介護福祉及びその教育の充実を図ることは極めて重要である。同町唯一の公立高校である本校では、管内の高等学校に先駆けて「コミュニティ・スクール」を導入し、地域と一体となって介護福祉に係る授業を行う「高専連携」を推進するなど、これまでも地域の声を積極的に取り入れて学校運営を行ってきた。特に、平成26年度には北海道介護福祉学校と連携協定を締結し、同校の人材や設備を活用した本校の生徒による職業体験を実施するなど、本校は地域の介護福祉教育を推進し、同町が目指す福祉のまちづくりに積極的に寄与してきた。

同町では小中学校で介護福祉教育に力を入れており、ここに高等学校が接続することで 12 年間を「一つの学び」として捉えた介護福祉教育が完成した。本校では、生徒たちが地域の多くの人々と触れ合い、地域での様々な体験活動を経験することを通して、互いを思いやり、助け合い、励まし合う気持ちを醸成し、我が町「栗山」に愛着を感じて自ら町の担い手として貢献したいという意欲を涵養する教育を進めている。



ベッド介護実習



車椅子介助実習



手話講座

※上記写真は令和4年度選択教科「生活と福祉」での取組